

バザール

2025. 12. 17

この前、新潟の弥彦山に行った。ロープウェイに乗った。たった6分間で山頂駅に着くのだが、ガイドさんが付いていた。このガイドさんがすばらしかった。話し方、話す内容ともに人を惹きつけるものがあった。山頂に到着すると拍手が起きるほどだった。

そこで、考えた。このガイドさんは、1日に何度話しているのだろう。ロープウェイは、15分間隔である。ガイドさんは他にもいる。それでも、1日に6分間×〇回で、かなりの回数と時間を話しているのではないだろうか。いわば、話すことの繰り返し学習である。

このガイドさんのすごいところは、何度も同じような話をしているはずなのだが、心がこもっていたのである。心を感じたのである。自分たちは何度も同じ話をするができるが、お客さんにとっては、最初で最後のロープウェイ乗車になるかもしれない。そんな思いがあるのではないだろうか。勝手に思いを巡らせてしまった。

多くの人は、人前でうまく話したいと思っているだろう。私もそうである。だが、今の学校教育は、このニーズに応えていない。昔からそうである。小学1年生から高校3年生までの間に、話す機会はある。だが、その回数と時間が少なすぎる。当然、うまく話すことができずに社会へと出ていく。学校教育ではなく、社会に出てから話すトレーニングをしている人が多いのではなかろうか。

では、学校教育の中で考えると、どの教科が話すことを担うのだろうか。すべての教科で話すことはできる。だが、取り立てて話すことの学習をしているのは、国語科であろう。国語科には、「話すこと」という領域がある。この国語科における「話すこと」の学習が問題である。これを改善しない限り、いつまでも話せる日本人は育成されない。

弥彦山ロープウェイのガイドさんのように、授業の中で話すことの繰り返し学習をすればいいのである。昔、国語の授業に「バザール方式」というものを取り入れたことがある。例えば、好きな本を人に紹介する。これを学級全体の前でやってしまうと、発表は1回で終わってしまう。これでは、発表はしたが、話せるようにはならない。

お店を開く形にする。お客さんが来る。その度に、好きな本を紹介する。最初は、たどたどしかった話が、回数を重ねるうちに身振り手振りも入って、どんどん上達していく。話すことの繰り返し学習である。話す度に、反省点が出てくる。次の回で、それを改善していく。このような経験を積んでいくと、話すことのへの意識が変わっていく。

今まで長きにわたり生きてきた。人前でうまく話せたことなどあっただろうか。バザール方式は、「話すこと」の学習を変える起爆剤になると思うのだが、どうだろう。弥彦山ロープウェイの名ガイドさんから、そんなことを考えさせられた。